

2020 年度連続講座 「野生動物とヒトを学ぶ」

<第3回>野生動物問題を取り巻く人間事象とその対応について 武山氏 Q&A

— ご質問への回答 —

狩猟者数低下については色々な要素があると思いますが、大きな理由は金と手間ではないかと思っています。というのも、日本の労働環境や賃金は失われた30年と言われるように、あまり良いとは思っていないからです。

例えば、猪を狩ってどこどこに持っていったらいくら貰えるというのが簡便なら人は増えるのではないかと思っています。銃は危険なので、取得や維持などに手間がかかるのは仕方ないと思います。しかし、維持費などお金もなかなかかかるので余力資金の無い人はやろうとは思わないのでは無いでしょうか。

Q1

地域の人のやる気の低さや無勉強や協力性の低さがあるのは分かりますが、世帯や個人化などの家族の形態やライフスタイルが昔とは違うので、今に合わせた方法を作るしかないのではと思いました。

獣害対策や地域の自然を調べることはメリットになると言われても、住んでる人はメリットの経験はなく、肩書きが凄くても他人への信頼度が急に上がることもないでしょう。それに、現在の暮らしから変化するという事は心理的に大変だと思います。諦めや面倒くささがあるのも当然ではないでしょうか。それを脱する活力を沸き起こすためには何が必要でどうすれば良いのか。

地域の人の活力を上げるのとは別に、例えば獣害対策や支援サービスの事業を起す事や狩猟で安定し十分な収入が入る事を身をもって誰かが実践する結果が必要ではないでしょうか。低賃金な日本社会には、副収入がトレンド化してきているように思います。そこで、狩猟にかかる投資が十分副収入としても選択肢に入るような仕組みや周知が必要なのかもしれません。

A1

「今に合わせた方法を作るしかないのでは」とのご意見には、私も賛成です。捕獲を「業」として成立させるよう、社会の仕組みを変えていく必要があると思います。

一方で、日本の農村は、そこに暮らす人々が資源を共有し、様々な災害等にも協力して対応してきた長い歴史があります。これはいわゆる「農村協働力」と言われるものであり、これなくしてはそもそも農村の暮らしが成り立ちがたいことも様々な研究で明らかにされています。公助と共助を併存させる（今はあまりに公助が小さい）ことが課題と思います。

Q2

自らがわな免許をとり、捕獲に取り組んでいる農家の方が増えています。

しかし捕獲個体の捕殺（主に止め刺し）については、精神的な苦痛が大きいです。害獣といえども、毎日のように屠殺時の悲鳴を聞いていると、営農を続けていくことも苦痛に感じてしまうようです。そのような方々への精神的なケアなどはありますか？

A2

ご指摘のように「精神的苦痛」は極めて大きな問題と認識しています。大変もうしわないのですが、現時点で私は「直接的な解決方法」を持ち合わせていません。

一方、捕獲者の精神的なご負担を少しでも軽減するための「間接的な解決方法」として、年に1度の供養祭を開いたり、供養塔を建立したりする地域を知っています。このような形で、目に見える形で悼む気持ちを共有することも、地域全体で捕獲者をサポートすることにつながると思います。具体的なケアについては、今後の課題と認識しております。関連する研究者とも問題意識の共有を進めて参ります。

Q3

地域の方と関わることで様々な難点があると思いますが、提言などをなかなか理解してもらえないときに心がけていらっしゃることはありますか？

A3

基本的なことですが、やはり対面で話をし、一緒に現場に出る機会を多く持つよう心がけています。また、地区にセンサーカメラを設置して、その地区の野生動物の動画を撮影してお見せすることで、まずは興味を持って頂くことも効果的だと感じています。

Q4

医療に擬えた講座、とてもわかりやすく地域社会問題への取り組みとしての応用もでき、とてもためになりました。合意形成の中で必ず反対意見はありますが、どう言う形で納得してもらうか、感情論や宗教、思想に起因する反対意見をどう受け止めるか等、具体例や対処方法等ありましたら教えて下さい。

A4

私は大学の研究者として、「科学的であること」を心がけています。捕獲数等の数字や、地域の農地の現状を1筆単位で分析した結果、既往の研究で明らかにされた知見等を、動画や図面で丁寧に説明しています。私の経験では「科学的である」ことへの、地域の皆さんの信頼は高いと感じています。またこのように、地域にとっては第三者であるいい意味での「よそもの」が客観的に話をすることで、地域の合意形成を促進することができると思っています。

Q5

野生動物の農業被害拡大の背景に狩猟者の減少というのがありました。近年はわなを使う人が増えていますが農業被害を抑えるのを目的とした時、わなと猟銃それぞれを使う時のメリット、デメリットについて知りたいです。

A5

猟犬を伴う銃猟(巻き猟)は、捕獲だけでなく、野生動物を追い払う効果が期待でき、忌避効果により野生動物が生息しづらい地域を作る効果があると思います。一方、野生動物の新規移入地区では、この効果が災いし、野生動物を追いやってさらに別の地区への移入を促進してしまう可能性があります。また、捕獲個体数だけを見れば、かけた時間と人手に対し、捕獲個体数が少なく効率が悪いという側面があります。ただし、巻き猟には、地域の「文化」という側面もありますので、野生動物対策効果だけで、その善し悪しを図ることはできません。

一方、ワナ猟は、効率的に野生動物を捕獲することが可能であり、特に地区や農地に侵入しようとする加害個体をピンポイントで捕獲することに優れた方法です。

なお、広域・長期的に見れば、加害個体を捕獲するだけでなく、地区全体の生息数を減少させる「個体数管理」が必要となります。この場合は、ワナによる効率的な捕獲に加え、シャープシューティング等の新たな捕獲体制の導入も検討していくことが必要と思います。

Q6

先生が実際に農村の野生動物被害の聞き取り調査を行っていらっしゃる中で、住民の方々が一番困っていることは何か多いと感じますか。具体的な動物種や被害状況を交えて教えていただけると幸いです。

A6

愛媛県ではサルによる柑橘類への被害が深刻です。樹園地は、主に山の斜面を利用しているため、サルの生息地に近く、樹木であるため柵による防除も難しく、さらには被害が発生する「収穫期」は農家の皆さんが収穫で忙しく追い払いという活動を行いづらいという課題があります。

また愛媛県では、瀬戸内海の島嶼部に海を泳いで渡り移入したイノシシによる被害が深刻です。島にはもともと捕獲者がいないうえ、島の外から気軽に捕獲者が捕獲に訪れることも難しく、初期の対応が遅れるという問題があります。

Q7

私は狩猟免許を取得しても、道具の準備や、捕獲した際の手間を考慮してしまい、狩猟を実行できずにいます。私以外にもそう思っている若者が多いと感じます。もし、地域住民の中でそういう人々がいたら、どのような支援をしたり、どのような行動をとったりするべきだと思いますか？

A7

私は常々「捕獲ステーション」のアイデアを持っています。役場や役場の出先機関に「捕獲ステーション」があり、そこで銃を含む狩猟道具の保管や、捕獲個体の計測と申告、捕獲後の解体・残渣の処理ができるなど、捕獲者が便利に使えるコミュニティースペースがあれば、マンション住まい等の方でも気軽に捕獲に携われ、かつ捕獲個体に関わる様々な情報収集が可能になるのでは・・・と思います。既にそのような整備を行っていらっしゃる地区があれば、ぜひ教えていただきたいです。愛媛県松野町のNPO法人森の息吹の取組は、「捕獲ステーション」の考え方に少し近いものがあります。小さな町だからこそそのユニークな取組です。

・地域ごとに症状が異なることや、野生動物管理計画にも個別事例があるとのことでしたが、具体的にどのような違いがあるのでしょうか、大まかに分類できる内容ありましたら教えてほしいです。

Q8

・非科学的な言説の流布について、現状を視覚的に共有することだけでは対処できない気もするのですが、他にどのような対処方法がありますか。

・実際に計画を施行したときに、状況の変化、地域協働力以外に成果の程度を変える要素はありますか。またその要素による負の影響を妨げる方法はありますか。

・地域社会にとって野生動物管理を持続可能な形にしていく上で重要なポイントはありますか。

・ぱっと思い当たるところでは地形、人口、農家率、野生動物の種類、農業形態の種類、水田率、耕作放棄地率、自治会等地区の組織体系、都市からの距離、竹林面積、猟友会の組織体系等があります。

・やはり粘り強く働きかけることだと思います。また、一つモデル地区を作ることができれば、その周りへの波及効果を期待できます。

A8

・一つには農地の状況が挙げられます。圃場整備等を行い条件の良い農地を整備できている地区では、耕作放棄地の解消や、新規参入者による農業の展開が見られ、結果として野生動物対策に係る地域組織の活性化が見られます。一方、負のインパクトとしては、災害が挙げられます。愛媛県でも平成30年7月豪雨による被災で、柵やワナが失われ、さらに捕獲活動を行う上で重要な山間部の道路も未だに復旧道半ばです。このような状況において、いかに早く野生動物対策のための体制を再興できるかが（専門的にはレジリエンスの強化と言います）、その後の持続可能な野生動物対策において鍵を握ると思います。

Q9

私は将来地元の県庁で獣害対策に携わりたいのですが、就職できたとしても3年で異動することになると思います。公務員として長く獣害対策を行っていくにはどのような仕組みや体制が必要になるのでしょうか。

A9

やはり専門行政職員の育成が課題と思っています。各自治体に「野生動物管理専門官」のようなポストや、「野生動物管理対策センター」のような組織があり、野生動物管理のみならず、農村計画、農業、林業、生物多様性等、農村の資源管理に精通した人材を配置する必要があると思っています。大学等の研究機関等の人事交流も効果的かもしれません。

Q10

小集落では、以前から主にシカ・サル（CSF 蔓延前はイノシシも）による家庭菜園への被害が発生しています。家庭菜園は地域住民の楽しみの一つですが、このような被害に対しては、行政からの防除柵設置費用補助等が受けられないのですが、全国的に見ても同様の傾向にあるのでしょうか。

A10

現在のいわゆる「鳥獣害対策」が、行政機関では農林業部局によって担われ、農林業の問題に矮小化されていることが大きな問題と考えています。農村の資源や暮らしを野生動物から守るという視点が、現在の鳥獣行政には欠けていると思います。家庭菜園への補助を行う自治体は、私は聞いたことがありません。しかし、ご指摘のように、家庭菜園は農村の資源であり暮らしの一部ですから、農業や林業と分けることなく守るべき対象です。少しずつかもしれませんが、考え方、夜会の仕組みを変えて行かれたらと思っています。

Q11

野生動物に対して地域で取り組む機運を高めることも必要ですが、中山間地域では、地域自体の問題（伝統、文化、しきたり、区長の仕事増加）に加え、関係人口の減少が、今後の課題かと思っています、そのあたりについても、講義いただければと思います。ありがとうございました。

A11

関係人口の視点は今後、重要性が増すと考えています。農村だけで農村の問題を解決するのではなく、農村のがんばりのおかげで野生動物から守られている都市の住民が、いかに野生動物対策に関わっていくのか、その社会的な仕組みを構築していくことも課題です。

Q12

農村から都市への野生動物の進出を防ぐためにも、農村での野生動物対策は重要と思います。守られている都市から農村へ、守っている農村から都市への意識交流は今後必要となるのでしょうか。いわゆる過疎対策とも異なり、直接的な都市住民の生活環境に影響してくる問題だと思います。

A12

ありがとうございます。1つ前に頂いたご意見にも回答いたしましたように、都市の関わりは極めて重要な視点であると思います。

Q13

農村計画学では、対策の主体は農村の住民で、住民の共助をいかに進めるか、という理解で良いでしょうか。生活圏へのクマの出没についても、同様に考えるべきでしょうか。農村と奥山天然林の間には人工林や里山などがあり、林業被害などがありますが、この部分の対策の主体はどのように考えられるでしょうか。私は森林を研究対象としているので、今回講演されたような内容について、もっと関わっていく必要があると感じました。

余談ですが、田上山（たなかみやま）は明治の初めにはすでに荒廃しており、ここでの例としては違うと思いました。

A13

・「生活圏」に出没するクマへの対応は、自助や共助ではなく、公助であるべきです。クマだけではなく、イノシシやサルにつきましても、「生活圏」への被害は同様と思います。

・田上山の件につきまして、教えていただきありがとうございます。荒廃の歴史が長いんですね。それだけ、当時は野生動物の生息地が長期にわたり喪失されていたということかと思います。

— ご要望などへの回答 —

R1

合意形成プロセスについて、もっと具体的にお話を聞いてみたいと思いました。

A1

ありがとうございます。私は、野生動物対策だけではなく（というよりは実はむしろ）、農村における農地整備、地域整備、土地利用計画等を研究の対象としています。そこでは、必ず「合意形成」が必要となります。今後、この「合意形成手段」の開発や研究は、さらに重要性が増すと考えています。

R2

説明がとても分かりやすかったです。農村計画学をはじめて知りましたが、野生イノシシの対策を地域主導でやってもらうことが大切だと理解しました。

A2

ありがとうございます。地域住民が主体的に動くことが、自らの手で農村での暮らしを楽しみ豊かにすることにつながると考えています。

R3

このような取り組みのコーディネートを誰が担うのか、が問題だと思う。

A3

ご指摘の通りです。人材育成が今後の鍵を握ると思います。

R4

時代背景から現代の地域の問題まで幅広く、具体的に示して頂き、大変対策業務に有効でした

A4

ありがとうございます。問題の奥の深さを、皆様と共有できたらと思っていましたので、そのような感想を頂きありがたく存じます。